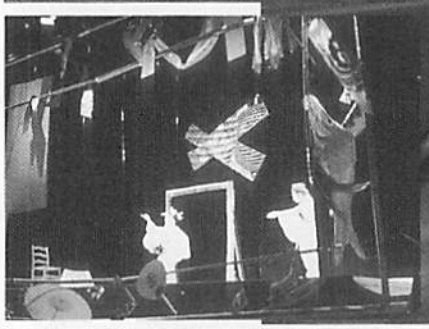
FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

文化が舞い、日本が踊る。

和と洋のコラボレーション。そこから垣間見える我々の日本。

ライター／木村紀子　写真／鈴木誠一



「可能性」――そんな言葉が脳裏を過る、ある意味では建都1200年の京の夜を飾るに誠に相応しい、イベントであった。7月8日。京都府立府民ホールアルティで行なわれた「舞う　DANCE」は、日本舞踊、能、モダンダンス、作曲、演奏、そして建築と、多方面で活躍するアーティストたちの手によって創られた斬新なものである。以前から大変注目されている彼らの舞台は、今回も客席を満員にし、そしてその三分の一は外国人というインターナショナルな雰囲気であった。中心となるのは日舞、そしてモダンダンスとバレエの世界でそれぞれ活躍している藤間勘素女とハイディー・S・ダーニングのふたり。同じ芸術というフィールドの中で、まったく異なる表現方法を持つこの二者の舞踊が重なりあうのは、他に例を見ない新らたな実験と言ってよいだろう。オープニングの「メモア・デ・ジャポン」は、ゴッホやモネのジャポニズム絵画をモチーフに、日本舞踊とモダンダンスのふたつが見事に絡み合うという非常にミステリアスな作品。また大喝采を浴びたラストの「テールズ・オブ・Gedatsu」は、ジョセフ・ハウシルのオリジナルアイデアによる幻想的な舞台である。海の中で、外の世界をまったく知らずに暮らす人魚が王子と出会い、そこから美しい足を授けられ未知の世界へと旅立ってゆく。一見お伽話の「人魚姫」だが、制約された既成の世界から新しい空間へ踏み出して行くというこのストーリーは、まさに異文化の融合によって生まれる新世界そのものでもある。そしてそこからより明確に、我々の日本が見えてくるという部分でこの試みは成功している。言葉をまったく必要としないコミュニケーション法だからこそ成し得た結果ともいえる、舞台であった。

FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

今度の日曜日は、天空の遊園ラピュタ遊びが楽しい。

保津川下りだけじゃない亀岡へ、いま出かけよう。

ライター／大音美弥子　写真／内藤貞保

バーチャルベースボールやＲ３６０、シュータウェイⅡ等、迫力の最新アーケードゲームが完備したスペースは、地元の子供に独占させるには惜しすぎる。

京都、京都とイバるな京都。他府県民の目から見りゃ、宮津も舞鶴も福知山も亀岡も京都である。なかでも亀岡って町は、もしも町に運勢があるならば、歴史上わりについていない町だった。

その一、亀山城を建てたのは、あの明智光秀。その後〈裏切りもん〉の小早川秀秋なんかも城主になっている。

その二、城の名からもわかるように旧名は『亀山』。明治初年「三重県の亀山と混同するから…」という失礼な理由で、亀岡に改称させられてしまった。

その三、亀山城跡には明治中期から出口王仁三郎率いる大本教の本部が置かれたが、時の政府の大弾圧を受け、ほぼ破滅状態に落ち込んでしまった（戦後は再建され、十数万人の信者を集めている）。が、人と同じく町の運命も変転する。亀岡駅前にはクニッテルフェルト通り（オーストリアの同市と昭和39年に姉妹都市盟約。ク市にもカメオカ通りはある！）だってあるし、7月号本誌『ニュースな街ネタ』欄で紹介した烏骨鶏の飼育も順調だ。また、流通業界では宝歴年間創業のマツモト一本やりだった亀岡に、二つの大型店舗が前後して進出。平和堂系のアル・プラザ亀岡と別系統のサティ亀岡である。

京都からわざわざ足を運ぶ値打ちがあるのは、「天空の遊園ラピュタ」と命名されたアル・プラザ亀岡の3階フロア。なんとメリーゴーランドやモノレールまでそろった、超スケールのゲームランド・タカラ島を中心に、夜の12時まで楽しめるボウリング場、ワールド・レストランの3つがその全容だ。地元では「名」のサティ、「実」のアル・プラザと、評価が定まってきたようだが、一度は行って、自分の目で確かめてみたい、亀岡の元気ぶりなのだ。